

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00894

研究課題名（和文）言語横断的視座によるリテラシーとアイデンティティの相互発達に関する縦断的研究

研究課題名（英文）The longitudinal study of the translingual development of literacy and identity

研究代表者

根本 浩行（Nemoto, Hiroyuki）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40452099

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、海外留学で研鑽を積んだ日本人学生を対象に留学前、留学中、留学後、卒業後の縦断的調査を実施し、言語や文化の境界線を越え母語、第二言語能力の相乗効果により形成される言語横断的リテラシーとアイデンティティの相互発達過程を考察した。その結果、言語横断的能力はその場だけに留まる一時的なものではなく、流動的資源となり場面や文化を越え経時的に変化しながらリテラシー発達とアイデンティティ変容を促進することが分かった。また、第三の視点や言語横断的な間主観性、他者に対する明瞭性の留意と評価、両価感情の調整などがこの相互発達過程を促し、グローバル社会における雇用適性を高める効果をもたらすことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語横断的な言語行動の分析により、ポスト構造主義的アイデンティティ研究における言語管理理論の有用性が確認され、さらにポスト構造主義と社会文化理論および言語横断的視座の相互関係を裏付ける結果を明示するに至った。人々が文化の垣根を越えて異文化適応する際に、自ら持ち合わせている資本をアフォーダンスとして留意、評価することにより、言語的、文化的に異なるコンテキストで資本を適宜変容させながら活用できることが明らかになった。また、このような資本の言語横断的適用がアイデンティティ変容を促し、状況に応じたリテラシー形成へと繋がることが分かった。

研究成果の概要（英文）：Based on a longitudinal case study of Japanese participants who experienced a yearlong study abroad (SA) at university, this research explored the ways they translingually negotiated literacy and identities by merging their L1 and L2 resources in situated literacy practices. The case study was conducted not only before, during, and shortly after SA, but also during their job-hunting phases and even after they were employed. The findings demonstrate that translingual competence is not temporarily activated but can serve as a mobile resource to enhance situated literacy and identities across time and space. The developmental processes of translingual literacy and identities were contingent upon how the participants developed a third space, constructed translingual intersubjectivity, and managed ambivalence and intelligibility to others. This study also indicates that such translingual development facilitates former SA participants enhancing their employability in our globalized world.

研究分野：社会言語学

キーワード：ポスト構造主義 言語横断的視座 アイデンティティ リテラシー 言語管理 異文化適応 社会文化理論

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

これまで、海外留学における異文化接触や異文化適応に関する様々な研究が行われてきたが、近年では第二言語習得における実験的、認知的アプローチだけでなく社会文化的アプローチによる研究も進展している。また、第二言語習得や異文化適応の捉え方が多様化し、異文化接触の再概念化が求められる新たな段階に突入していることも看過できない。実際、リング・フランカとしての英語の役割が拡大する中で、母語話者だけでなく非母語話者を含む英語使用者の多様性が重んじられるようになるにつれて、第二言語学習者を統合的動機付けから言語習得をする「新参者」として捉えることの妥当性が問われるようになってきた。そのため、言語使用コンテキストや異文化コミュニケーションの流動性に着目し、グローバル化する社会において状況に応じて言語学習者・使用者としてのアイデンティティが変容することも考慮しつつ異文化接触現象を多角的に調査する必要性が高まっている。

### 2. 研究の目的

上記の研究動向を踏まえ、本研究は、英語圏の大学に一年間留学し研鑽を積んだ日本人学生のリテラシーとアイデンティティの相互発達過程を留学前、留学中、留学後、卒業後に分け言語横断的視座から質的・量的に調査した。詳細は以下の通りである。

- (1) まずは留学前の準備段階において、母語能力が第二言語リテラシーとアイデンティティの形成にどのような影響を与えるかを解明
- (2) 留学中の異文化接触場面での言語行動に焦点を当て、第二言語リテラシーおよびアイデンティティの言語横断的発達過程の探究
- (3) 留学後は、言語横断的能力が日本の所属大学への再適応や就職活動をどのように促進または抑制するかを検証
- (4) その後、社会人となった研究対象者の追跡調査を行うことで、言語横断的リテラシーと言語横断的アイデンティティの更なる発達とこれらの相乗効果を分析

### 3. 研究の方法

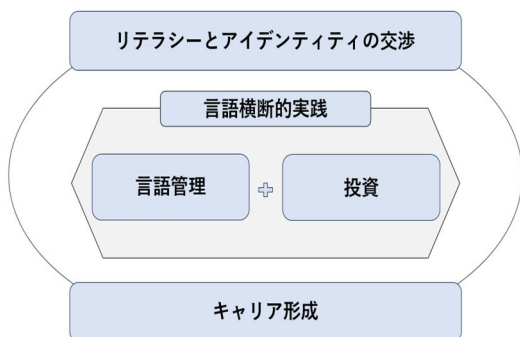
留学準備段階、留学中、留学後、卒業後の四段階に分け縦断的調査を行った。まず、留学前の学生 57 名にアンケート調査を実施し量的データを収集・分析した。そのうえで、研究対象者を 11 名に絞り込み、留学準備段階および留学中のケーススタディを行い、記述式アンケート、ダイアリースタディ、フォローアップ・インタビューを活用し、質的データを収集した。また、就職活動における言語横断的リテラシーの適用と言語横断的アイデンティティ変容を分析した。その後、社会人となった研究対象者の追跡調査を実施し、グローバル社会における雇用適性と言語横断的能力に関する質的データを収集し、新規データと過年度のデータを照らし合わせて縦断的分析を行った。分析結果は研究対象者に文書で報告し、研究者側の解釈と研究対象者の見解に齟齬が生じていないか確認を求めるとともに、さらなる自己省察を促し、新たな評価・意見を引き出すことにより、補足的データを収集した。

### 4. 研究成果

本研究は、言語や文化の境界線を越え母語、第二言語能力の相乗効果により形成される言語横断的リテラシーとアイデンティティの相互発達過程とその動的特性を、言語管理理論を用いて探究した。言語横断的な言語行動の分析により、ポスト構造主義的アイデンティティ研究における言語管理理論の有用性が確認され、さらにポスト構造主義と社会文化理論および言語横断的視座の相互関係を裏付ける結果を明示するに至った。特に、文化的規範や価値観、自己認識、他者認識を言語横断的に交渉し、母語と第二言語の修辭的強みを統合したストラテジーを活用することで、他者との利害、権力関係を調整する様々な言語管理が実践されることが明らかになった。また、この言語横断的なことばの営みは、文化的相違点を中立的に評価し、異文化間の共通性を見出すなど、状況に埋め込まれた相互行為を批判的に分析することで効果を発揮することが示された。このような言語管理により、第二言語リテラシーへの適応および母語リテラシーへの再適応を促進するメタ認知能力が形成された。これにより、研究対象者は自身の実践ネットワークやコミュニティ内での位置取りを再考し、新たな帰属方法を模索しながらハイブリッドで中立的な言語・文化横断的アイデンティティを作り上げていった。さらに、留学中に培った文化資本や異文化接触規範を、様々な慣習を評価する尺度として適用することで、言語横断的な判断基準を作り上げ、学術能力の発達やキャリア形成を向上させることができた。

また、言語横断的アイデンティティ変容における一連の言語管理プロセス(規範の交渉、異文化接触の留意・評価、調整計画、調整ストラテジー)に影響を及ぼす様々な要因を明らかにし、多種多様な言語行動を事例として用いてアイデンティティの時空間的变化を捉えた。これにより、言語管理研究にも新たな洞察を示唆することができ、当該研究領域のさらなる発展へと繋がる方向性を提示した。この分析結果に基づき、グローバル社会における雇用適性と異文化接触の解釈を深め、異文化接触の留意・評価がリテラシーの発達とアイデンティティ変容に与える影響

を再考察することもできた。本研究では、人々が文化の垣根を越えて異文化適応する際に、自ら持ち合わせている資本をアフォーダンスとして留意、評価することにより、言語的、文化的に異なるコンテキストで資本を適宜変容させながら活用できるようになることも明らかになり、このような資本の言語横断的適用がアイデンティティ変容を促し、状況に応じたリテラシー形成へと繋がることが分かった。



また、左図のとおり、社会人となった研究対象者の追跡調査では、複数の理論を有機的に組み合わせ、キャリア形成におけるリテラシーとアイデンティティの交渉に関する考察を深めた。言語管理行動と Darwin と Norton (2015, 2016) が提唱する「投資 (investment)」に基づく言語行動が連動し、言語横断的なことばの営みを促進することが明らかになり、様々な言語横断的实践がリテラシーとアイデンティティの相互発達に繋がり、キャリア形成に結びつくことが示された。

この複数理論を融合した研究枠組みを用いて、母語と第二言語でそれぞれ別々に構築された社会文化的知識やスキル、規範、価値観などがどのように混ざり合い、言語や文化の境界線を越えて様々な場面で流動的に適用されるかを再検証した結果、複数言語の相乗効果はその場だけに留まる一時的なものではなく、言語横断的能力自体が流動的資源となり、場面や文化を越え経時的に変化しながら言語行動と言語に対する行動に影響を与えることが分かった。さらに、言語や文化のハイブリッド化による第三の視点、言語横断的な間主観性、他者に対する明瞭性の留意と評価、両価感情の調整、そして主体的な位置取りを確立するための言語横断的戦略の活用などが、海外留学経験を有する若手社会人が雇用適性を高めるうえで、効果的に機能することが例証された。

社会文化的知識やスキル、規範、価値観などがどのように混ざり合い、言語や文化の境界線を越えて様々な場面で流動的に適用されるかを再検証した結果、複数言語の相乗効果はその場だけに留まる一時的なものではなく、言語横断的能力自体が流動的資源となり、場面や文化を越え経時的に変化しながら言語行動と言語に対する行動に影響を与えることが分かった。さらに、言語や文化のハイブリッド化による第三の視点、言語横断的な間主観性、他者に対する明瞭性の留意と評価、両価感情の調整、そして主体的な位置取りを確立するための言語横断的戦略の活用などが、海外留学経験を有する若手社会人が雇用適性を高めるうえで、効果的に機能することが例証された。

本研究における縦断的調査により、認知的、社会文化的研究アプローチの相補性を高め、組織レベルでの言語管理に向けた言語横断的枠組みの糸口も見出すことができた。研究対象者それぞれの職場環境とイデオロギー、リテラシー慣習の関連性を明らかにし、言語横断的思考や行動を促進・抑制する組織レベルでの言語管理の仕組み、またその組織レベルの言語管理が個々のアイデンティティ発達に与える影響を考察することで、応用言語学研究の発展に寄与しうる新たな理論的示唆を提示するに至った。これにより、言語横断的な営みに関するミクロレベルの研究にメゾ、マクロ分析を導入するための洞察を得ることもできた。

今後、上記の経緯を踏まえ、ポスト構造主義的アプローチを用いて異文化接触に起因するアフォーダンスを入念に調査し、言語横断的混淆性がアイデンティティ変容に与える影響を探究していく必要があると考えられる。そのため、内的要因と個々を取り巻く外的要因に焦点を当て、個々の言語使用者が言語横断的混淆性をどのように捉え、状況に応じたアイデンティティをどのように形成していくのかさらなる分析が求められる。また、これまで異文化接触をミクロ、メゾ、マクロレベルの階層別で捉えた研究は多々あったが、ミクロからマクロまでを連続体として捉え、言語使用者とコンテキスト、イデオロギーを体系的に繋ぎ合わせる実証研究は十分になされていない。そのため、今後は階層間の整合性に主眼を置き、言語横断の重層的構造に関する包括的な考察も必要となるであろう。

本研究の成果は、国際社会言語学会、オーストラリア・ニュージーランド応用言語学会を含む複数の国際学会で発表され、国際的に発信された。2022年にはドイツの Peter Lang 社から刊行された『Interests and Power in Language Management』にて、他者との利害や権力関係を調整するための言語横断的なリテラシー発達とアイデンティティ変容に焦点を当てた単著論文、“The investment in managing interests and power through study abroad: Literacy and identities from a translingual perspective” を発表した。また、本研究課題はチェコ共和国カレル大学との共同研究へと繋がっており、当該研究の成果を含む共編著を Prague Papers on Language, Society and Interaction シリーズの第7巻として2025年に公刊する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Hiroyuki Nemoto, Marek Nekula, Tamah Sherman, Halina Zawiszova	4. 巻 -
2. 論文標題 The investment in managing interests and power through study abroad: Literacy and identities from a translingual perspective	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Interests and Power in Language Management	6. 最初と最後の頁 267-292
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3726/b19351	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 根本浩行	4. 巻 17
2. 論文標題 書評：Goro Christoph Kimura and Lisa Fairbrother (eds.) (2020) A Language Management Approach to Language Problems: Integrating Macro and Micro Dimensions. John Benjamins Publishing Company	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語政策	6. 最初と最後の頁 161-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Hiroyuki Nemoto
2. 発表標題 Exploring translingual literacy and identities from a language management perspective
3. 学会等名 3rd International Conference on Sociolinguistics (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroyuki Nemoto
2. 発表標題 Negotiating translingual literacy and identities through the post-study abroad career development
3. 学会等名 ALANZ-ALAA-ALTAANZ Conference 2022: Applied Linguistics in the Asia-Pacific Region (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 根本浩行
2. 発表標題 接触性に起因するリテラシーとアイデンティティ：言語横断的視座からの考察
3. 学会等名 言語管理研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroyuki Nemoto
2. 発表標題 The translingual development of language management competence: Career development beyond study abroad
3. 学会等名 6th International Language Management Symposium (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroyuki Nemoto
2. 発表標題 Managing literacy and identities beyond study abroad: A translingual perspective of career development
3. 学会等名 ALAA/ALANZ2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroyuki Nemoto
2. 発表標題 The development of translingual literacy and identities through study abroad
3. 学会等名 CLaSIC 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
チェコ	カレル大学			